

せなかむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第三十七号（一日発行）
平成四年十月一日

古平風土物語

安全丸の遭難事故 1

高橋 源 五口

この四月は、鯨の豊漁が続いていたが、その後、大時化がやって来た。四月十二日の午後のことである。

前日から吹いていた強い北風が、北東風に変ってますます強くなり、大時化になった。

それぞれの漁場では、建網や差網の船から磯舟まで、大波を恐れて矢来の上や、道路にまで捲き揚げて、船が陸に並んでいるようだった。

海に突き出て作つてある矢来に突き当たる大波は、しぶきとなつてふり掛け、立っている者たちは皆ずぶぬれであった。浜辺の玉石は、まりのように転がっている。

浜通りの家や番屋、納屋には太いロープが何本も掛けられて

大風による倒壊を防いでいる。

防波堤の無かつた当時の古平瀬はこの風にはまったく弱く、荷役で停泊している船や、避難船が海難事故に遭うことがたびたびあった。

この日も、古平瀬には多くの船が停泊していた。本州方面からの船が多く、弁財船（和船）が多かつた。中には白ペンキ塗りの格好のいい数少ない帆船（洋型帆船）や、当時珍しかった蒸気船もいた。

これらの船は、本州から米・みそ・しょう油・塩・砂糖・酒類・菓子などの食料品のほか、わら製品などの漁業資材、衣料品、日用品、雑貨を積んで来ていて、帰りには海産物や内陸からでん粉、豆類、雑穀を積んで

行くのである。

午後になるとこの東北風は、粉雪も混じつてますます強くなつてきた。私は、兄たちと一緒に、風に揺さぶられる番屋でうろうろしていた時であつた。浜の見張りに出ていた若い衆が、「弁天の崎から、帆船船が、おら方の浜さ向つて寄つて来たどオー」と、怒鳴るようにして知らせて行つた。

兄たちと一緒に見に行くことにした。厚いドンザを来て、赤毛唐（ケットウ）で頬かぶりをして、吹っ飛ばされそうな強風の中を浜まで行つた。矢来の上の人混みから沖を見ると、船はみんな風の吹いて来る方にへさきを向け、錨綱を張っている。

蒸気船は、エンジンをかけつ放

しで波とたたかっている。ところが二隻の帆船が、高波にもまれ、横になつて岸に寄せられて来るのが見えた。錨綱が切れたのだという。こつちの方に寄せられて来るのは、三本マストの大型の帆船で、二本マストの小型の帆船は、帆を張つたまま港町の方へ寄せられて行つた。吹雪模様の中で乗組員たちが甲板で手を振り、助けを求めているのが見える。

荒れ狂う高波を受けるたびに船体が大きく揺さぶられながら、だんだん岸の方に近づいて来る。そして、とうとう仲谷漁場の矢来のすぐ沖で、船底が岩につつかえて傾き座礁した。

岡田家の商用控え

嘉永四年（一八五二）の岡田家の商用控えの中に古平方面での風のことについて書いている。

「オタルナイ、フルヒラ共に、子丑子（ね・うし・ね）北北東」の風をまともに受ける時は時化になる。すべて北から吹く風は時化になり、鯨、その他の漁に差しさわりのある。

・風の名、ヒカタ（南西）、西ヒカタ（西南西）、下り風（南南西）、アイ（北）

山せ風（南東）、タバ（タマ）風（北西）

これらの名前は、今でも浜で使われているが、この中のヒカタは、アイヌ語のヒカタ（南風）がなまったものらしいという説がある。

実業団女子チームに

歯をくいしばり一勝！

古平町の野球の歴史の一コマ。昭和三十九年の夏。サロンパス本舗の女子準硬式実業団チームと、中島グラントで二試合をしたことを思い出した。

当時、日本に準硬式ボール（ラビットボールとも呼ばれていたが、硬式ボールと同じように、打てばカーンと気持ちよい音がした）の女子野球実業団が五、

し、グラントも公式戦並みに整備して迎え入れた。

サロンパスチームは、日焼けした美人揃いで、良く訓練されたチームであった。真つ赤なスパイクシューズに、揃いのユニホームもびったりで、少しばかり圧倒された。だが実業団とはい

い女子チームに負けるわけにはいかない。まずAチームと試合したところわがAチームの健闘及ばずあつさり負けてしまった。ヒットは打つのだが、塁に出ると牽制に刺されたりで、女子チームらし

故郷の想

う 福井孝幸

六チームあった。その優勝チームであるサロンパスチームが、小樽葉業組合の招きで、小樽地元チームと試合をしたことがある。その折、私のところに秋野社長から連絡があり、受け入れ態勢があるなら、古平で一泊の予定で、男子チームと試合をしたかどうか、ということであった。早速OKの返事をし、宿は中央旅館にお願いした。

いきめの細かい試合運びをしてくる。後で聞いたら、監督は、慶応大学の名監督と言われた人とかで、指導が徹底していて、マナーもすこぶる良かった。次にBチームとの試合になったが、これも負けたとあつてはメソツ？ もあるので、私は叱り飛ばすけんまくで試合をし、どうにか、ようやくの思いで一勝することができた。

私の目から見て、基本がしっか

りしていて、チーム力は相手の方が一枚うわ手だったように思う。

その後、何年かして女子ソフトボールチームが出来、これが今の実業団ソフトになったように思う。ゴルフの女王と言われる岡本綾子も、当時の日本を代表する選手で、アメリカチームよ

昔の蝦夷地は、しばしば飢きに苦しめられた。

その原因は、米の生産地であつた、主として東北の凶作、輸送の不便、漁が少なく本州からの船が来なかつたことなどによるものであつた。

この救済のため・幕府が治めていた時代には「備米」として各地に米を貯蔵した。

米は主に羽州米（出羽の国の別称で秋田県南部米（岩手県）などであつた。

明治二年、開拓使の時代になって、開拓使は、常平倉（奈良時代今から千二百五十年ほど前に米の調節を図るために置かれた

備 米

古平にも備蓄米倉庫

り強かつたという。かつてのサロンパスチームの中にも、今、ゴルフ界で名をなしている選手がいたのではなからうか。

その後何年かして、北島三郎率いる野球チームと試合をしたことがあるが、そのことはまた後にする。

役所）にならつて、当時の札幌・石狩・浜益・厚田・小樽・忍路・積丹・古平・美国・余市・岩内などの各郡に倉庫を設け、新潟・柏崎両地方から一万二千七百六十四石、盛岡地方から二百三十三石を移入して、飢きんによる混乱に備えたのである。

この当時の食糧事情は、いったん凶作に見舞われると想像以上の悲惨なものがあつた。沿岸に生活している者は、海産物などで飢えをしのぐことが出来たが、木の実や笹の実を食料としたという。

平年の時でさえ、越年の食糧には難儀していたのである。

国破れて―郷土の復興を

古平推進同志会

(一)

尾山清

昭和二十年八月二十日終戦、日本は無条件降伏をした。戦争を知らない世代の人たちに、敗戦を迎えたこの日の感情を理解してもらふことは、到底無理かも知れない。複雑な気持ちの中、でほとと胸をなで下ろしたのも事実でした。それは、長い間の地獄のような生活から解放されたといふことの実感だったのかも知れません。しかし、食料不足の中での敗戦は、それは悲惨なものでした。でも、あの戦争がない、平和というものの喜びを体で感じとっていました。

敗戦に打ちひしがれていたころ、希望を持って郷土古平の復興を叫び、推進同志会発足の導火線になったのは、若き日の今良六でした。

そのころ、一日の仕事が終わると、よく私のところへ来ました。この混沌とした町の活性化を語り合う日々でした。

やがて五人、十人と仲間が増

えてきました。皆が何かを求めていたのです。

こうして、昭和二十一年三月ころには、仲間も三十人を数えるまでになり、会を結成して、奉仕活動をしようという展望が開けてきました。いよいよ会を結成することになり、古平の発展を推進する同志の集まり、といふことで、私の提案した「古平推進同志会」という名前が、平凡な名前でしたが全員賛成

で決まりました。

会の名称も決まり、会長を選出することになりました。協議をした結果、最年長でもあった近藤雪一（近藤医院院長）を再適任者として選出し、ここに名実共に古平推進同志会が発足したのでした。

名称	古平推進同志会
会員	五十五名
会長	近藤 雪一
幹部会員	今 良六 港 町
同	尾山 清 新地町
同	高橋 銀作 丸山町
同	岩崎 倉治 港 町
同	熊木 良吉 新地町
同	鈴木 安 同
同	吉川 義雄 丸山町
同志会では、	会長以外特別に

役職はなく、会員が平等な立場で運営に当たり、活動をすることをモットーとした。総務的な仕事は私が担当した。

一番困ったことは、集会場の問題であった。当時は、公民館のようなものなど勿論無かつたし、また、適当な場所も見当たらなかった。止むなく、私の家の二階、三十畳の広間を開放することにした。

これで、まず活動の拠点を確保することが出来た。



古平の石碑

埋もれている

郷土の文化財

先日（九月二十七日）雨の中、町内の異業種間交流会という若い人たちの団体と一緒に、町内の石碑を歩いてみました。文学碑と言われるものから、記念碑、墓碑、庚申碑（塚）など、ざっと数えても三十余りもあります。

人通りもあつて、よく知られている碑もありますが、今はすっかり草に覆われてしまつていたり、中には、書いてある字が消えてし

まった碑もあります。

こんなにたくさん碑があるのに、案外、古平の人たちに知られていないのは残念なことです。町外からの人たちが、熱心に訪ねて来ています。

これらの石碑は、ただ黙っていると何もしゃべりませんが、こちらから何かを知ろうとすると、いろいろなことに答えてくれます。案内書へ郷土の石碑散策を作りましたので、ご希望の方は利用して下さい。

二十世紀初めの《古平郡》

(歌棄村・つづく)

▼沿革Ⅱ昔は場所請負人の番屋や板倉などがあり、また、出稼ぎに来る漁民の家が数戸あったが、明治五年、開拓使が村名を歌棄村とした。土地が狭く、これから発展する余地なく、現在の戸数は十数戸である。

▼人口・部落Ⅱ明治三十二年末現在の戸数は十六戸で、人口は八十六人である。青森県人がその半分を占め、昔、出稼ぎに来ていた人たちが居着いたのである。人家は海岸通りの南側に、山を背負って建っている。

▼漁業Ⅱ明治三十一年の鯨建網は十七か統、差網百十一放で、漁獲は千二十一石であり、明治三十二年は、建網十五か統、差網百五十一放で、漁獲は千九百石余りあった。部落の建網営業者は四戸であるが、六か統を経営し、三十二年には最高三百五十石、最低百石内外であった。差網は、一人の漁獲が四、五石で、差網業者は鯨漁が終わると

雑魚漁をする。海産物は古平へ運んで、小樽商人に売却する。

▼農業Ⅱ漁民が、漁の合間に自家用の野菜、ばいれいしょを作っているぐらいである。

▼生計・人情Ⅱ部落民は、皆漁業で生計を立てていて、困窮者は無い。民情は穏やかである。

▼教育Ⅱ学校は、沖村に通学している。(沢江村に学校が建つたのは明治十五年、明治二十四

【今日はこんな日】

沖村ずい道貫通

夢の積丹国道の幕開け

[昭和26年]



年に分教場となり、明治三十八年に分教場が廃止になり、本校に統合された。この時は、まだ沢江に学校があったのだから、沖村に通学というのは誤りではないか。

▼衛生Ⅱ飲料水は井戸水を使っているが、その質は良い。

▼神社Ⅱ稲荷神社があるが、明治八年、村社(神社の格)に昇格した。

(次回は、沢江村)

戦後間もない昭和二十三年、

民選後、初の町長となった大沢吉三郎は、運輸省札幌道路運輸監督事務所長へ、余市・古平間道路について陳情した。

さらに、積丹地方開発振興会長や関係町村長が、北海道知事・田中敏文、道土木部長池田一

夫に道路の完成を陳情した。

余市・古平間の道路は、今からおよそ百五十年程前に作られたものがその原形で、その後改良されたものの、一年峠と言われるほど、いくつかの峠にはきついカーブがあり、交通の名だたる難所であった。

余市まで約二十四キロを、バスに揺られて一時間五十分もかかった。

海岸の絶壁、山また山が連なっているこの区間に「海岸道路が建設される」と言う朗報は、初めは信じられないことであつた。工事完成後の伊藤町長の談話にも、「海岸道路を造ると言われた時はビックリ仰天した」とある。

昭和二十三年八月、工事はよいよ着工された。

工事はまず、最大の難所とされた沖村と湯内間の道路から始まった。山に近いと崖崩れや雪崩の危険が多いことから、道路をぐつと海に突き出すように計画され、物資輸送の関係から、セタカムイずい道の完成が急がれた。

そして、昭和二十六年十月、この区間の難工事がようやく完成し、湯内(現、豊浜町)で旧道とつながり、今までより距離はもちろん時間も大幅に短縮され、全線開通へ向けての沿岸住民の希望は、さらに大きくふくらんだのである。

